
柿の実の取り方

ななくさ よつは

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

柿の実の取り方

【Nコード】

N2092X

【作者名】

ななくさ よつは

【あらすじ】

小学生の女の子と、柿の木がある家に住む頑固じーさん。
女の子は頑固じーさんの柿の実を取ろうと思っていた。

どうすれば怒鳴られず、美味しい柿の実を取れるのか。

噂

「ねえ、しってる？頑固じーさんの柿の話」

「知ってる。朝、男子が取ったって言ってたよ」

私の学年では有名な話。

通学路にある頑固じーさんの柿。

一昔前の高い塀の家に、大きな大きな柿の木がある。

その柿が抜群に美味しいという話だ。

今朝もクラスの男子が柿の話をしているのを聞いた。

スーパーに売っている柿とは違い、もっと甘くてとにかく美味しいらしい。

でもその家に住んでいるおじいさんがとても恐い人で、捕まったら最後、泣いても泣いても許してもらえず、家にまで来て怒鳴り散らすらしい。

私は今日、その柿の実をこっそり、取ろうと思っている。

作戦

クラスの男子のほとんどは、その柿の実を食べた事があった。男子と仲の良い女子は分けてもらっていたけど、恥ずかしがり屋の私はその柿を食べる機会は全くなかった。

この日の為に、友達と帰る約束はしなかった。いつもはスカートだけど、塀の上に登るのでズボンを着てきた。

放課後になり、私はみんなが帰るのを少し待ってから学校を出た。

いつもとは少し違う通学路を通るので「知ってる子に会いませんように」と、ドキドキしながら頑固じーさんの家へ向かった。

同じ学校の人とすれ違う度に緊張したけど、私はなんとか柿の木にたどり着く事が出来た。

実行

柿の木は、色付いた葉を全て落としてしまい、鮮やかな橙の実だけを重そうに付けていた。

私は辺りを見回して、人が居ないのを確認しながらランドセルを降ろした。

よいしょ、とよじ登り塀の上に股がつて手を伸ばしてみる。枝に手は届いたが、実までは届かなかった。

私はゆっくり塀の上に立ち上がり、じっくりと枝を眺めた。

よく見ると、手の届く所に実はなく、遠くの枝が何本か折られていた。

私もジャンプすれば届くかもしれないけど……。

柿の実は諦める事に決めた。

また塀に股がつて、そのままゆっくり降りようとすると、クラスの男子が私を指差して「あっ！」と言った。

頑固じーさん現る

心臓が飛び出るくらい、緊張した。

よりにもよって、同じクラスの男子に見つかってしまった。

「こいつ、柿の実取ってるぜ」

男子がわざとらしく大きな声で言う。

「ち…違う」

顔が真っ赤になって、蚊の鳴くような声で言った。

でも、男子にその声は届いていなかった。

「じーさんに言いつけよう！」

そう言っていると、男子は頑固じーさんの家のチャイムを鳴らすと、逃げるー！！と言いながら走って行った。

「ま…待って」

私は塀から降りて、ランドセルを背負った。

家の方へ走り出した瞬間、ガラッと戸が開き、頑固じーさんが険しい顔をして出てきた。

柿の実の取り方

私は思わず足を止めてしまった。

頑固じーさんは口をギュツと強く結び、私を睨み付けていた。

その目をみたら、体が動かなくなつて、再び走り出す事が出来なくなつていた。

私の体は小刻みに震え、顔はさらに真っ赤になっていた。

少しの沈黙が、学校の授業よりも長く感じた。

頑固じーさんが、きつく結んだ口をゆっくり開いた。

「柿の実を取ろうとしたのか」

目から涙が溢れた。

怒鳴られるとか、耳を引つ張られるとか、そんな事頭の中に無かつた。

ただただ、真っ白になっていた。

「あの・・・あの・・・」

自分でも声を出した事に気が付かなかつた。

「ちょっと待つてなさい」

そう言うつ頑固じーさんは家の中に入つていった。

その時、私は全力で走つて逃げる事も出来た。

家に帰つて、扉に鍵をかけ、明日の朝まで家の外に一步も出たくなかつた。

でも、そうしなかつたのは、少しだけ、ほんの少しだけ、頑固じー

さんに柿の実を取ろうとした事を謝りたかったのかもしれない。

頑固じーさんが出てきた。

手には重たくぶら下がったビニール袋があった。

中には柿の実がギッシリ入っていた。

「持って行きなさい。」

私はポカンとした。

「あんたは悪い事をしようとしたが、柿の木を傷つけなかった。痛い痛い泣いていた柿の木の声が聞こえただろう。」

差し出されたビニール袋をゆっくり受け取った。

「あ、ありがとう．．．ごめんです。それと．．．ごめんなさい」

小さな小さな声だから、頑固じーさんには伝わっていないと思ったが、じーさんはちゃんと聞いていた。

「そう、『ありがとう』と『ごめんなさい』だ。帰ったらあの悪ガキ共にも教えてやってくれ。柿の実の取り方をな」

頑固じーさんは、今まで見たことないような、優しい顔で笑った。

「はいっ！ありがとうございます」

今度はハッキリと大きな声で言った。

そして頑固じーさんは、ゆっくり、家の中に入って行った。

私はもう一度柿の木を見た。

「お前すげーな!!」

男子達が帰って来た。

多分近くに隠れていたんだと思う。

「どーやって、柿の実もらったんだよ!」
「教えてくれよ」

私はニコツと笑ってこう答えた。

「それはね・・・」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2092x/>

柿の実の取り方

2011年11月30日15時51分発行